週報
こひつじ
第39巻　45号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室 119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師　米村　英二

イエスにとどまる

その三　とどまるとは継続すること

「とどまる」とは、継続するということでもあるだろう。

私は二一歳の時、モーレンカンプ宣教師のもとで働き始めた。しかし日々のスケジュールに授業というようなものは何もなかった。そこで悩んだ。こんな所に長くいて、はたして伝道者としての訓練を受けられるのかと。私は現状がいやで遠くばかりを見ていたのだ。

ところが神は、言われた。

「ここがあなたの場所だ」

私はそれを受け入れた。結局そこに五年いた。しかし振り返ると、それは私の人生で最も貴重な訓練の時となった。やはりとどまることは正解だったのだ。

大津に残ったときもそうだった。まだ二六歳だった私は思った。

「教会の責任を持つのは早い。もっと学びたい。できるものなら留学もしたい」

私はむなしい夢を追いかけていた。すると再び神は言われた。

「ここがあなたの場所だ」

私は言った。

「いつまでですか」

返事はなかった。それから五〇年がたつ。私は今もここにいる。しかし、それは何と恵みに溢れた時であっただろうか。

十数年も前のことだが、長いあいだ日本キリスト教団で牧師をしておられた小平先生が、大津に住むことになったからというので挨拶に来られた。

「ここで牧会を始めて何年になりますか」

と聞かれるので、

「もう、三五年になります」

と答えると、

「ええっ、そんなにも長く一つ所に？」

と驚き、そして言われた。

「三五年、ここから一度も動いたことがないのですか。ご立派ですね」

ただじっとしていることがそんなに立派なことだとは、これまで思ってもみなかった。ほかにゆくところもないので、ここにいるのかもしれないのだが、三五年以上も、同じ所で、同じ仕事をやり続けることは、それなりに独創的なことなのかもしれないと、私はその時、思ったものだった。

継続すること、これもまたイエスにとどまることなのではないだろうか。

いつだかコンサートに行った。演奏者たちに教会を練習場として使ってもらっていたので、そのお礼に私たちを招待してくださったのだ。

会場は熊本市内にあった。その日は少し車が混んでいたせいか、ずいぶん遠くに感じられた。

「コンサートにゆくというのは、一日がかりだね」

と私は妻につぶやいた。

その時、ふと思った。そう言えば、多くの方が、熊本から、この同じ道を通って礼拝のために大津の教会に来てくださっている。しかも最近は新型コロナの流行で、賛美も説教も、そして交わりもみな短い。おそらく運転時間のほうが、教会の滞在時間より長い場合もあるのではないか。それでも休まず来てくださっている。それも何年も続けて。

私は多くの方が、それほどまでに教会を愛してくださっていることに感動した。そして思った。

これらの多くの方の忠実な参加があればこそ、日曜ごとの礼拝はいのち溢れる集会となっているのではないかと。

このように、「とどまる」とは継続することである。そしてその継続からいのちが流れてくるのである。

そこでイエスは言われた。

「人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます」（ヨハネ一五の五）と。

私も、今日やるべきことを継続することによって、イエスにとどまっていようと思う。（終）

今日の礼拝

○第一礼拝は午前一〇時から、第二礼拝は午前一一時から。

○教会学校は午前一〇時から。

○説教は米村牧師。

先週の礼拝

○司会は岩崎宏志さん、奏楽は吉岡隆夫さん。

○説教は米村牧師。申命記二二の六、七から。鳥の巣を見つけたときの神の命令について。

先週の出席

第一礼拝が四一名、第二が三八名、合計七九名（男二四、女五五）子ども六名。合わせて八五名。

新来会者

○クリスさん、ノリコさん夫妻。坂本夫妻の友人で四国の高松から訪ねてくださいました。

○甲田峰子さんのお母様。

『こひつじＪｒ』

『こひつじＪｒ』第二〇号ができました。今回の「あの人インタビュー」は岡本はるなさんです。

牧師身辺

先週は、関連教会の牧師会に参加してきました。これまで毎年一回集まって交流を続けてきましたが、新型コロナの流行で長く中断していました。今回の交流会は四年ぶりです。参加者のひとりである豊田牧師がこんな感想を自分のフェイスブックに書いていました。

「久しぶりのグレイス・フェローシップの牧師会が静岡で開かれた。だいたい米村さんがトピックを投げかけ、持論を展開する。その後、いろいろな意見が飛び交い、白熱することもある。いつも刺激を受ける学習の場のようだ。基本、互いに『さん』と呼び合い、上下関係はない。フラットな関係が心地よい」

そのあとぼくたちは東京に向かい、品川で長男の耕一と落ち合い、いっしょに妻の姉を千葉の施設に訪ねました。姉の認知症はやや進んでいるようでしたが、今回は、「遠くから来てくださったのでしょう。驚いたわ、ありがとう」と言ってくれて、自分の妹が来たのだとわかったようで、妻もうれしそうでした。

キリスト教との出会い②

三浦　桂

大学卒業後は県立高校で英語教諭として働き始めました。大学時代に研究した英語の教授法を実践できると、期待に胸を膨らませながら臨んだ社会人生活でしたが、仕事は想像以上に過酷でした。睡眠時間は毎日三時間程度しか取れず、半年も経たずに心身ともに体調を崩し退職することになってしまいました。周りからは「もったいない、惜しい」と言われることもありました。大きな挫折を経験し、当時は自分が生産性のない人間に思えてしまい、情けなく、自分の存在意義を問う日々が続きました。

ちょうどその頃、母から誘われ、我が家で行なわれていた家庭集会に参加し、そこで初めて米村さんの話を聞きました。そして「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」（マタイ四の四）という聖句を聞き、どん底にいた私はこの聖句と米村さんの話に心底励まされ、少しずつ立ち直っていくことができました。学生時代に様々な牧師の方々の話を聞く機会がありましたが、これほどまでに心の奥底まで入り込み、心に平安がもたらされたのは初めてでした。もっと聖書のことを知りたい、米村さんの話を聞きたいと思うようになり、大津教会へ足を運ぶようになりました。

（続）